

広島市立大学学術リポジトリ

毛沢東のフォークロア：
墓地風水と帝王伝説をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 千代, KATO, Chiyo メールアドレス: 所属:
URL	https://hiroshima-cu.repo.nii.ac.jp/records/278

毛沢東のフォークロア——墓地風水と帝王伝説をめぐって

加藤 千代

Folklore on Mao Zedong :
Concerning tomb Feng Shui and Emperor Legends

Chiyo KATO

The Tomb *Feng Shui* tells that a descendant will become an emperor, if a tomb is built at a place, named *Zhen Long Di* (the place of real dragons), where especially good *qi* (positive energy) is concentrated. It is said that Mao Zedong is a case in point : he got the power because the tomb of his grandfather was situated at *Zhen Long Di*. This paper analyses eleven kinds of legend of *Zhen Long Di*, which have been ignored in the folklore studies, and compares them with the famous legend of *Gan Sheng Di* (an emperor who is born, corresponding to Heaven). In the legend of *Zhen Long Di*, people have the decisive role in making an emperor or enjoying power and fortune by finding a good graveyard and holding services for his ancestors : the good *qi* from the land is said to correspond to the descendants through a tomb or bones of their ancestors. I will conceptualize this crucial role of people by the term of *Ren Zu Ganying* (correspondence between people and ancestors) and contrast it to *Tian Ren Ganying* (correspondence between Heaven and people) in the legend of *Gan Sheng Di*, where Heaven plays the main role. Then this paper will argue existence of a belief in revolutionary power-changes by *Ren Zu Ganying* at very root both of the obsession of people to the *Feng Shui* of tombs and of the spread of this legend over a wide area.

はじめに

I. 真龍地伝説

1. 「ブーグオウの恩返し」
——毛沢東祖父の墓
2. 文献による事例
——民族英雄
3. 祖父と大伯父の墓地争い

II. 墓地風水と真龍地

1. 風水と『葬書』
2. 墓をあばく

III. 天人感応と人祖感応

1. 毛沢東の感生帝伝説
2. 権力の循環

おわりに

はじめに

毛沢東 (1893~1976) は、言うまでもなく近現代の政治家、思想家、詩人であった。しかし、ひとた

び、彼にまつわる伝説となると、われわれの予想をはるかに越えて、その大半が、中国歴代帝王伝説のコンテキストで読み解くものとなる。この小論では、中国帝王伝説のサブ・ジャンルの一つである真龍地伝説を対象とする。この伝説は、墓地風水説に由来

し、いかにも中国的な地域性を持って、中国帝王伝説の核心をわれわれに告げるものである。

墓地風水説によれば、良い地相に墓をつくれば子孫繁栄が約束されるといい、なかでも子孫が帝王宰相になることを約束する、すぐれた埋葬地点を“真龍地”と呼ぶ¹。歴代皇帝の幾人かには、その祖父や父親の骨を真龍地に埋葬したゆえに、玉座にのぼることができたという真龍地伝説が、今日に至るまで伝承されている。毛沢東の場合は、祖父の毛恩普(1846~1904)の墓が、じつは真龍地であるという。

毛沢東の祖父の墓というのは、じじつ毛沢東が革命運動のなかで頭角をあらわすにしたがい、その出世を保証する“風水宝地”の墓といわれ、ついには真龍地の墓と喧伝されるようになった。そのために30年代には国民党軍による墓あばきに遭い、その石碑が半世紀後の1986年になって地中から掘り出されるという、数奇な運命を辿ったのである。

この小論は、従来、口承文芸の分野で研究対象としてほとんど論じられたことのない真龍地伝説に関して、とくに毛沢東のそれをテキストとして読む。すなわち、真龍地に先祖の骨を埋めると、なぜ子孫から帝王宰相が出るのかを墓地風水の原理から読み、さらに帝王伝説の枠組みによる真龍地モチーフの位置付けを意図するものである。

中国の典型的な帝王伝説といえ、正史に多様に記載され、従来、論考の対象になってきた「感生帝」伝説がある。これは、天との感応により生まれた帝王をいい、天人感応説によるモチーフである。

この感生帝とは逆に、天ではなくて地(祖先)との関わりで、帝王の出自を語る真龍地モチーフ、それを支える観念を、わたしは「人祖感応」という造語で概念化して、天人感応の対極に置く。そして真龍地伝説に表白される人びとの墓地風水への執念と、真龍地伝説の広範な伝承との根底に、この「人祖感応説」による権力循環論のあることを提示して結論とする。

I. 真龍地伝説

1. 「ブーグオウの恩返し」——毛沢東祖父の墓

最初の事例は「ブーグオウの恩返し」とわたしが付けた、毛沢東に関わる真龍地伝説である。1997年2月に重慶市走馬鎮工農村で採録した²。語り手は村の道士の余紹安(1925生)⁴。彼の家に二泊した折、この話をうかがった。彼はなかなか気品のあるもの静かな人物で、その人柄を表して、きめ細かい

語り口である。道士の修行は独学とのこと、今では末子の三男がその仕事(主に葬儀の差配)を受け継いでいる。以下は録音テープの全訳である(カッコ内は筆者の注、以下同じ)。

この話は、おとし(95年)だったか、龍鳳鎮(重慶市街区西部)の街道の茶館で聞いたものです。

ある年のこと、韶山(湖南省中部、毛沢東の生まれ故郷)で日照りが続き、それこそ樹の皮まで食い尽くすありさまだったそう。そのとき、一人の占い師がおって、風水(「地理」)や人相を見、運命判断(「算命」)もやった。名をブーグオウ(「不過五」)といった。というのも、人から何か占いを頼まれて、判断を言うのに、その言葉がなんとも短くて、五つの文句を越えないようなんだから、それで、みんなから「不過五」(五を越えない)と呼ばれていた。

占いの腕前は、なかなかのものだったけれど、なんせその年は日照りが起こったんだから、誰も占いを頼みに来る者などおりやせん。そのうちに、家族の者はというと、よそへ乞食に出かけ、死んだり、行方知らずとなってしまった。そうして、ブーグオウひとりが家に残された。そのままでは、死ぬだけだから、ブーグオウもやむなく家を出て、食いもんを探すことにした。ずっと歩いて、よほど遠くまでやってきたが、食いもんはおろか、水すら見つからない。歩けば、いよいよ喉が渇き、とうとう道端に倒れてしまった。

そこに、たまたま毛沢東が親父さんと二人で仕事をしていた。行き倒れを眼にして毛沢東は、もう死んでしまったのか、それともまだ息があるのかと思い、近付いて、ちょっと触ってみた。おや、まだ息があるぞ。息してるもんだから毛沢東は、当時まだほんの子どもだったんだが、大急ぎで、水をくみに行った。水をくみに行くと、うんと遠くまで。ところが水を入れる物がない。両手ですくって持って行くか、それじゃ、指の間から漏れてしまう。そこで上着を脱ぐと、袖いっぱい水を入れて走って戻った。服で水をくんだんじゃ言うまでもなく、漏れてしまう。袖の水は漏れてしまった。でも、服を絞れば、水はいくらか出てくるのだ。毛沢東はブーグオウの唇を開けて、服の水を絞つ

て飲ませた。口にいくらか水が入るとブーグオウは、体をピクッとさせたもんで、毛は、それとばかり、もっと多く水を飲ませた。と、ブーグオウはだんだんと息を吹き返した。息を吹き返したもんで、毛沢東は相手に自分の家に来るように言った。

毛沢東の父親、母親というのは、そりゃ物事をわきまえたお人で、決して貧乏人を嫌ったり、金持ちにへつらったりしない。あれこれ細かいことは言わん。それで自分の家に来て休むよう言った。ブーグオウはとっさに考えた。このお人の家に行けば、命が助かるじゃないか。このまんまじゃ、食うものもない、野垂れ死にだ。そこで、ありがたく家に行かせてもらった。行ってから台所に入ってみたら、食いもんは、なんにもない。ただ包穀杷（トウモロコシの粉を練って焼いたもの）が二つだけあった。

毛沢東は包穀杷を取って渡して、湯と一緒に食べさせた。相手は、それで食べると、腹一杯になった。こうして、ブーグオウは命を取り留めたのだ。「良かった、あとはここに泊めて休ませてあげればいい」毛沢東は喜んだ。そうして、洗面器に水をくんできて、顔や体を拭いてやり、薬を少し飲ませてやった。毛沢東の看病ぶりは、それはかいがいしく真面目だった。ブーグオウにしてみれば、それはもうほんとにありがたく、毛沢東を、子どもながら偉いやつだと敬服した。その親父もお袋さんも立派なもんで、乞食のブーグオウを見下すどころか、まるで家の祖父のように大切にされた。少しでも食いもんがあれば、まず彼に食わせ、なんによらず彼を大事にしたのだった。

こうして、早くも、ふた月あまりがたった。ブーグオウはいよいよ、いとまを告げることにした。家の者はもちろん引き留めた。引き留めたけれど、引き留めきれなかった。ブーグオウは言った。こんなに長々とお世話になり、わしも、家のことが気になるもんで、もう帰らせてもらいますと。そこで、毛沢東の親父さんが送って行くことにした。ずっと遠くまで送って行った。その道すがらブーグオウは、このふた月を思い返した。毛沢東と親父さん、お袋さんは、そういえば自分の素性を何も尋ねなかった。苗字や名すら聞かなかった。なんにも問いたださないうで、あんなに親切にしてくれた。普通だったら、世話してやる相手がどんな人間

か、どんな素性なのか、聞かずにすますわけがないだろうに、それを、あの一家はなんにも聞かなかったのだ。

ブーグオウは親父さんがどこまでも送ってくれるのに気が付いた。あれあれ遠くまで来てしまったものだ。そこで親父さんに言った。

「ひとつお礼をしたい。お礼をしたいのじゃ。これは、あんたの福運というものじゃろ。もし、あんたらがわしの命を助けてくれなかったら、わしもおしまいだった。そこで、わしが占ったとっておきの場所を教えてしんぜよう。これもあんたの福運じゃ。ほれ、あの山のあそこ、あそこはな、嫦娥奔月という龍穴じゃ。あそこを独り占めにしたかったら、まず墓から父親の骨を取り出して、箱に詰め、そうして、八月十五日のその日になったら、骨を持ってあそこに登り、夜、お月さんが上り始めたら、その場所に骨を埋めるが良い。そうすりゃ、ほんとの話が、将来、あんたの家から開国元勳が出るはずじゃ。このことは、あんたがひとり胸の中に納めておき、家に帰っても誰にも喋ってはならん。あんたひとりでこっそりとやり終えるのじゃ。そうして、やり終えたあとも、家の者には誰にも知られんようにな。」

ブーグオウはこう言って、親父さんにもう家に帰るようにと言って、二人は別れた。

親父さんは、ブーグオウに言われた通り父親の骨を箱に詰めた。やがて十五夜がやってきた。夕方になると、親父さんはワラ袋を背負い、草刈りに出かけるふりをして家を出た。ブーグオウに教えられた山のふもとに着いたときには、もう暗くなっていた。暗くて辺りがよく見えないので、闇雲に登った。登って尾根にたどり着くと、もう息が切れ足がヘナヘナになって前に出ない。ひと息入れようと思ったそのとき、ガレの石ころに足を取られ、ひっくり返った。と、運よく草がはえていた。とっさに草をつかんだ。さもなければ、崖下に落ちてしまい死ぬところだった。草を引っ張りながら、なんとか立ち上がった。そうして一歩一歩よじ登り、やっとこさ尾根に戻った。今度は用心して、岩を探し、そこに腰を下ろして、ひと息入れた。ひと休みした後、月が照らしている場所に近付きそこに骨の箱を埋めた。埋め終わった、その瞬間、なんと、まるで地震が起きたように、大地が揺れ、ドーンと音が鳴り渡った。凄まじい有

様だった。

「よし、これで首尾良くいったわい。」親父さんはそう思うと、すぐさま山を下りた。下にくだって林の中に入ると、木立が月明かりを覆ってしまい、道がさっぱりわからない。歩こうにも歩けなくなって、親父さんは草むらの中で一夜を過ごすことにした。そうして、空が白みはじめると、なんとか山道を探りながら下って家に戻った。

家の者はというと、一晩中寝ないで親父さんを捜していたんだ。一体どこへ行ったのか、わからなかったもんだから、みんな心配した。親父さんがどこへ行くと何も言わなかったもんだから。

親父さんが家に戻ると、みんなは尋ねた。夜中に、ものすごい音がしたんだが、父さんは聞いたのか、まるで地震のようだった。「わしも聞いたよ。あんまり、ものすごかったもんで恐ろしゅうなって、よう帰れなかった。あっちの洞穴で一晩明かしたんだ。」

あのブーグオウーは、こんなことも教えてくれた。

骨をあそこに埋めれば、お前さんの家から開国元勳が出るが、一体誰が元勳になるのか、その者には顔の顎にほくろが現れるはずじゃ。骨を葬ったら、そのあとすぐに、顎にほくろが現れるはずじゃと。

そこで、親父さんは家に戻ると、言われた通り子どもたちを呼び集めた。——毛沢東には、弟や妹が何人かいたんだから。親父さんは、呼び集めると、水を持ってきて、ひとりひとり顔を洗ってやった。毛沢東の番になって、洗ってやると、顎の所にほくろが見えるではないか。「どうやら、こいつらしいぞ。」というわけで、親父さんは、とりわけ毛沢東には心をくわいて育てたのだ。それで、あとになって毛沢東は勉強が好きになっていっぱい本を読んで、そのあとずっと革命をし続けた。それというのも、こんなわけがあったからだ。また、毛沢東の革命についても、ブーグオウーは、ちゃんと占っていた。「あせるな、あせったら駄目になる。ゆっくりとやれ」と言った。そんなわけで、毛沢東が建国するのに、それから三十年以上もかかったのだった。

この伝説は、これまで活字となって発表されたと

は聞かないが、全国的な広がりを持つと容易に推測される。というのも、一つには、全国津々浦々にネット状に広がる、伝統的なコミュニケーションの場である茶館で話されているということ。二つには、歴代皇帝の類話と同一の構造を持ち、また文献上の記載は五世紀にさかのぼり、通時的に一つの話型(タイプ)を形成しているからである。本稿では、その話型を独立させ、真龍地伝説と呼んで対象にするものであり、そのテキストの全体像は表 I (P.95) にまとめたとおりでである。以下、この表に沿って文献上の事例を読んでいくこととする。

2. 文献上の事例——民族英雄

はじめに代表的事例二話を紹介したい。一つは、「安の墓地さがし」とここで名付けたもので、文献的溯源による最も古い記録であると現段階において言えるもの。出来事の舞台は後漢時代(1~2世紀)である。またこの話は天子ではなくて宰相を約束するものであるが、現代採録資料にもその例(表 I. NO.8)がみられる。もう一つは真龍地伝説の事例のなかで最多を誇る宋の太祖(初代皇帝)・趙匡胤の事例(表 I. NO.6)である。

「安の墓地さがし」

安の父が死ぬと、母は安に父の墓地の場所を探させた。安はその道中、三人の書生に遇った。書生が「どこに行かれるのか」と聞いたので、安は旅の目的を言った。すると、書生は一つの場所を指して「ここに父親を葬れば、きっと代々、上公(皇帝を補佐する最高位の官職)になることができますよ。」と言うなり、三人の書生はたちまち消えてしまった。安は不思議なことと思い、書生らの占った場所に父を葬った。これによって安の家は代々栄えたのであった。(『後漢書』、巻75 中華書局版 1996:1522)

「趙匡胤の盗み聞き」

趙匡胤(宋・太祖)は子どもの頃、楊家のお屋敷に奉公して牛飼いをやっておった。ある年のこと、楊家の大旦那さまが、天寿を全うし登仙された。そこで楊家では大金を積んで、ひとりの陰陽先生(風水師)を招き、墓地選びを依頼した。先生は出かけて行って、半年もたった頃帰ってきた。その先生に楊家がどれくらいカネをつぎ込んだのか、よくはわからないが、ともかく、つぎ込んだだけの甲斐はあった。先生

表1. 真龍地伝説テキスト

	帝王宰相	主人公(骨を埋める者)	龍穴・霊物を教える者	龍穴・霊物	行 為	採録地	出 典
1	毛沢東	毛沢東の父親	看地理的 (風水師)	稜線上の 「嫦娥奔月」 の龍穴	骨を龍穴に埋める。	重慶市	加藤採録 1997
2	呉 孫権	孫権の祖父	三人の若者 (天の文昌宮の星)	ある地点	三人の若者は白鳥になって飛び立つ。		『異苑』 5C
3	前漢 平帝近侍	袁安 (BC1, 太子近侍)	旅の三人の書生	ある地点	三人の書生は消え去る。		『後漢書』 卷45, 5C
4	明・太祖 朱元璋	朱元璋の祖父と父	道士	洞穴	祖父の死後、息子が埋める。	江蘇省 泗州 (洞穴の場所)	『龍興慈記』 (紀錄彙編卷十三) 16C
5	宋・太祖 趙匡胤	趙匡胤	堪輿先生	水中の石牛	趙が父親の骨を石牛の口に入れ、託された風水師の骨を石牛の角にかける。	湖南省 湘鄉	『趙匡胤父葬石牛口』 『呆黃忠』 1933
6	趙匡胤	趙匡胤 (牛飼い)	陰陽先生	崖の石籠 端午節に口 を開ける	趙が父の骨を龍口に入れ、風水師の依頼主・楊家の骨は角にかける。	河南省 開封	『龍口葬父』 『朱元璋故事』 1929
7	朱元璋	朱元璋 (牛飼い)	地師 楊公仙師 (風水師の祖師)	沼底の牛 海中の牛	朱の父の骨を牛が呑み込む。 託された風水師の骨は牛角にかける	広東省 陽江 翁源県	『葬得好墳山』(一〇) 『呆黃忠』
8	明の丞相	丞相	江湖術士 丞相の母は堪輿家 の娘	龍脈	丞相の母親が夫の骨を龍脈に埋める。	広東省	『広州民間故事』 1929
9	趙匡胤	趙匡胤 (神婚による出生 娘×カワウソ)	県令	海中の龍	趙が父の骨を龍口に入れ、託された県令の骨は龍角にかける。	江蘇省 灌雲県	『灰大王』 1935 『中国民間文学三 套集成灌雲県巻』 1987
10	同上	青年時代の趙匡胤 (神婚による出自 婚×スッポン)	農民の楊が南方人 から聞き、趙に教 える	川底の石籠	趙が父の骨を石籠に食べさせ、託された楊家の骨は角にかける	吉林省	『吉林省民間文学 集成・前郭爾露欺 巻上』 1988
11	清・太祖 ヌルハチ	ヌルハチの結婚 (神婚による出生 娘×カワウソ)	地師	淵中の石籠	太祖の父が獺の骨を石籠の左角にかける。	咸鏡北道	今西龍論文 1930

※ 2—4 は古文献の記述。5—11 は近現代の採録。出典が複数あるものは細部が異なる

は戻った日の晩、夜中に書齋で若旦那さまにこっそりとう告げた。

「旦那さまのめでたいご陰宅は、もう探し当てました。あそここそ、まことの真龍地でありますぞ。あそこに旦那さまを埋葬すれば、若旦那さまは、遠からず、玉座にお登りになるのは必定。ただし、この件は決して他に漏らしてはなりませんぞ。

その場所というのは、向かいの山の崖にあります。崖下は深い淵になっており、その崖の途

中にひとつ岩が突き出ています。その岩は、龍の形をしており、その龍の口は、毎年、天中節（端午節、五月五日）の夜、三更三点（夜中の十一時半～零時）に、口を開き、三点を過ぎると閉じてしまいますが、この龍口こそが旦那さまの墓所でございますぞ。

そこで、あなたさまがやるべきことは、まず、こっそりと旦那さまのご遺体を焼いて灰にし、それをふるしきにしっかりと包み、天中節のその刻限までにあそこへ行って龍口に遺骨の

包みを入れることです。首尾よくいけば、もう皇帝の玉座はあなたさまのものですぞ。」

陰陽先生のこの話は、じつは奉公人の趙匡胤に盗み聞きされてしまったのだ。趙は、さっそく家に戻って父親の遺体を焼いて灰にし、それをふろしきに包んだ。天中節の日になると、早くから出かけて岩の辺りで待っていた。やがて暗くなり、三更三点になったその瞬間、はたして石龍の口が開いた。趙匡胤は、それとばかり父親の遺骨を龍口に投げ入れた。

龍口が閉じようとしたそのとき、楊家の若旦那と陰陽先生があたふたとやってきた。なんと龍口は閉じようとしているではないか。大旦那の遺骨を慌てて投げたのだが、もう間に合わない。龍口は閉じてしまった。でも、骨の包みは石龍の角に引っかかってくれた。陰陽先生は深くため息をついて言った。

「天の定めには逆らうことはできません。これが運命なんだから、誰も責めるわけにはいきません。しかしですね、(骨が石龍の角にかかった)ので楊家は今後、子々孫々に至るまで將軍の地位を獲得したことに間違いありません。」

こういう次第で、その後の宋朝においては、ずっと趙家が天子、楊家が將軍を務めたのだった。(語り手：兪琴、『龍口葬父』『朱元璋故事』1929:63-64)

表Ⅰのテキストについて、まず基本的な事項をいくつかいえば、数量的には現在わたしの手元にあるのは、二十話にすぎないが、採録地や出典をみると、この伝説がほぼ中国全土にわたる伝承を今日まで保持していることがわかる。もっとも五十年代から七十年代にかけて、風水はもとより、この種の伝説も迷信としてタブー視されていたため、公の資料としては記録されていないようだ。

文献の溯源は、今のところ成書年代五世紀の『後漢書』や『異苑』(表Ⅰの2)にまでさかのぼる。墓地風水のはじまりは漢代という説もあり、また墓地選定を亀甲や獣骨で占うト葬の歴史は、墓地風水よりもよほど古くて、『周礼』や『儀礼』に記録があり、先秦時代にさかのぼる。(デ・ホロート 85-89) さらに、大地が有機体と同じく気を持つという地脈(のちの風水でいう龍脈)の観念は、『史記』蒙恬列伝(蒙恬は秦の將軍)に表明されている。それゆえ真龍地伝説も5世紀以前にさかのぼる可能性は十分あるといえよう。ともあれ、真龍地伝説は、

中国という長大な時空とともに、その歩みを残してきたのだ、とわれわれに感じさせるものがある。

この伝承の担い手は、風水師であることをつぎに強調すべきだろう。表Ⅰに見るとおり真龍地あるいは靈物を教える者は、呼称こそ地域により異なるものの、ほぼ風水師で一致している。古文獻に風水師が登場していないのは、その時代にはまだ風水師の活動が一般的ではなく、その範囲がせまかったことを意味しよう。また田舎わたらいの風水師が営業上の利益のために、この伝説を持ち歩き流布させたことも容易に想像できる。

表Ⅰの項目にある「真龍地・靈物(水中の龍や牛)」や「行為」は、この伝説の核心すなわち“先祖の骨を真龍地に埋葬すれば子孫から帝王宰相がでる”という、われわれ異邦人からみれば、まるで壮大なマジックにも似た仕掛けを説明する、道具の役割を担い、風水に直接するので、次章で扱うことにしたい。

さて、毛沢東のフォークロアの視点から、読み解くべき問題点をあげれば、それは、毛沢東が、なぜ真龍地伝説によって語られるのかである。ただ単に、毛沢東が、新中国の国家主席すなわち、帝王の地位にのぼったという理由で、あとから伝統的な真龍地伝説に附会されただけなのだろうか。それとも毛沢東には、この種の伝説が成立する個別的な理由があったのだろうか。

じつは、個別の理由が存在するのである。第一には、本稿の冒頭で紹介し、また次節において詳論するように、毛沢東の祖父の墓が、生前から風水宝地として地元では名高く、孫の毛が出世するにしたがい、その墓が真龍地として喧伝されたこと。第二の理由は、真龍地伝説テキストに読み取るべきもので、しかも、それは、表Ⅰの近現代テキストの主人公に、宋の太祖・趙匡胤(927~976)が突出して多いことに関わるのである。以下、まず趙匡胤について考えてみよう。

そもそも、真龍地伝説の主人公に趙匡胤が居することには、いくつもの疑問符がつく。真龍地伝説のような話型をなす伝説は、表Ⅰに見る如く構造的に同一プロットであるから、主人公の固有名詞は入れ換えがきくわけで、膨大な数の帝王宰相を歴史的に輩出してきた中国において、いまま少しバリエーションがあつてしかるべきと思われる。口頭伝承の採録者は、資料価値からいって異伝を重視するのは当然で、趙匡胤以外の主人公があればそれを発表し、活字にしているはずである。

さらに趙匡胤その人は、役人の家系の出身であり、貧しい平民出身の劉邦や朱元璋の人気には及ばず、その伝説はトータルにいては朱元璋のそれと比べようもないほど少ない。それにもかかわらず、趙匡胤に集中するのは、理由があるべきであろう。その理由が、じつは毛沢東と真龍地伝説の関わりの個別的理由と重なるのである。

趙匡胤の事例の格別に多い理由についていえば、一つにはこの話の中で、將軍の位を約束される楊家の存在である。北宋の時代、北方異民族の遼や金の侵略に対して、一族あげて戦った楊將軍家は、歌劇、講釈、民間伝承によって民族英雄のトップの座を占める。趙匡胤は、伝説にあっては、彼自身の威光というよりは、人々に絶大な人気を持つ楊將軍との関わりによって語られるのである。さらにいえば、伝承者の思い、すなわち「本来、楊家が天子さまになるはずだったのに、ちょっとした偶然のいたずらによって將軍の地位に甘んずることになった。でも楊將軍の方が、人民のために天子に優る働きをしたのだ」という、彼らの歴史の読み方のもとに、人々は伝承してきたのではないだろうか、わたしの想像は、つい拡がってしまうのである。

第二の理由は、この伝承の主たる担い手である風水師、その祖師（「行神」、職業神、ギルド神）が楊公仙師であること。楊公仙師は、唐代に風水理論を発展させた最大流派・江西派（墓相理論を主とする）の始祖の楊筠松（八世紀、何曉昕、1990:69-72）と考えられる。風水の祖師の楊が、楊家將軍と結合し、將軍が宋代に活躍したことから、その初代皇帝・趙匡胤に附会したと読むのが妥当だろう。

これらの理由は、近現代のテキストの伝承背景に、西欧列強と脱亜日本の侵略・脅威が存在し、かつ風水師の活躍・暗躍のあったことを物語るものである。

ひるがえって、毛沢東の真龍地伝説をこの趙匡胤・楊家將軍の事例とのコンテキストで読んでみよう。すると、毛沢東が、抗日救国運動、抗日戦争の中でまぎれもなく楊家の將軍同様に民族英雄であったこと、そのことが、真龍地伝説の彼に附会されたもう一つの理由であると、読み解けるのではないだろうか。興味あることに、第三章でとりあげる毛沢東の出生譚の一つに、毛沢東は、楊將軍家の名だたる將軍たちのなかでも、ひとときわ戦功の多い楊六郎（六男の楊延昭）の化身であると伝えられる。「ブーグオウの恩返し」の話自体に、むろん「楊」と名のつく登場人物は見られない。ここでの「民族

英雄」の読みは、中国近代の時代性や、宋の趙匡胤・楊家將軍との関係性の中で、その意味内容をとらえようとしたまでである。

ともあれ毛沢東の真龍地伝説は、祖父の墓の真龍地化から醸成され、さらに、抗日戦争における毛沢東の民族英雄化によって、意味内容を深めて今日に至っていると、その歩みを見ることもできよう。

3. 祖父と大伯父の墓地争い

毛沢東の真龍地伝説である「ブーグオウの恩返し」が、語られる現実的な起因は、じつは次のような毛の祖父と大伯父による墓地争いにあったと思われる。毛の祖父・毛恩普（字は寅賓、号は翼臣）と大伯父・毛恩農（1841～1907 字は嘉賓、号は徳臣）とは、弟と兄の関係にある。毛沢東の祖父の代は、二人兄弟のみである。

墓地争いのそもそもの発端は、祖父にあるのではなく、祖父の兄すなわち毛沢東の大伯父・毛恩農にある。大伯父は祖父と同様、農民としての生涯を送ったが、祖父が私塾にも上がれなかったのと違って、二年間私塾で勉強し、風水に通じていた。

自分たち兄弟のために、墓地として二ヵ所の“風水宝地”を見つけた。一つは、牛形山、一つは大石鼓（虎歇坪）と呼ばれる場所である。ところが、両者を比べてみると、大石鼓の方が断然優れている。祖父も大伯父も大石鼓の宝地を自分の物にしようとして、お互い譲らない。結局、先に死んだ者が、大石鼓の宝地をとるということになった。大伯父の方には下心があって、自分が弟より五歳年長だから、自分の方が先に死ぬと胸算用した。ところが、人の寿命は計り知れなくて、年下の祖父の方が先に死の病に倒れた。しかも祖父は、いまわの際に最後の力を振り絞って声を出した、「大…石…鼓」と。

埋葬の期日もまた大安吉日を選ばなければならない。とりわけ祖父の場合、“美穴地”に埋葬されるのだから、なおさらである。占った結果、なんと八年も後の八月某日と出た。そこで、やむなく遺体をおさめた棺を大石鼓の墓地予定箇所に安置した。予定箇所の土石は少しでも掘ってはいけないのだ。棺をむしろや藁などで覆い、その上に土砂をかけた。

やがて八年の年月が流れ、ついに埋葬の日となった。人々が大石鼓に集まり、先に棺の覆い

を取りのけた。棺は色つやもびかびかして八年前そのままだった。みんなは土石を掘り始めて、アッと息を飲んだ。棺を納める部分だけが土となっていて、そのまわりは岩であった。岩全体が太鼓のようで、もともと岩を叩くとドンドンと音が鳴り渡ったが、ひとたび祖父を埋葬すると、叩いても音一つしなくなったという（高菊村ほか、1993:79・80）

毛沢東の祖父の墓は、韶山市の毛沢東生家から、西北に4キロ離れた滴水洞と呼ばれる溪谷の山中にある。わたしは97年にお参りしたことがあるが、確かに、普通の墓（家の近くの山の斜面に位置し、北を背にして南向きに建てるのが基本）と違って、山のやせ尾根に位置して、ブーグオウの伝説に説かれたように、溪谷を辿り、最奥部の急坂の山道を小半時もよじ登らなければならない。もっとも現在は滴水洞が毛沢東故居や毛沢東記念館とともに観光地化され、祖父の墓にはコンクリートのジグザグ道がつけられており、陵線上のお墓の横には、飲み物を地面に並べた露店や、記念写真用のスポットも用意されていた。

その墓に関する調査の詳細は、ここで報告する余裕はないが、一つだけ注意を喚起しておきたい。それは、先の引用文にもあるように、毛の祖父の埋葬が死後八年間延期された事実についてである。毛の祖父は光緒三十年（1904年）11月に亡くなっているが、墓の碑文には埋葬し碑を建てたのは民国元年（1912年）8月とある。

このような埋葬延期は、特殊な例ではなく中国にあっては、古来ひとつの習俗といえるものである。デ・ホロート『中国の風水思想—古代地相術のパラード』で詳論されているように、そもそもは、死去した肉親の復活を願う作法であった。しかし、それが後世風水思想の浸透により極端に肥大したため、すでに『晋書』には埋葬延期の禁止令の記載が見える。その後の王朝の多くは、親の埋葬延期をした官吏を免職にした。毛沢東の祖父の時代すなわち清代においても同様であった。ちなみに『大清律例』卷十七「喪葬」に「風水の説は後代自り起れるものにして、本より謬妄にして信ずるに足らず。」「年久しく暴露して葬らず、最も是れ不孝の大なるものなり。」「若し風水に惑ひ、及び故に托して停柩して家に在らしめ、年を経るも暴露して葬らざる者には、杖八十とす」とある（124～131, 176）。

歴代王朝による批判・禁止・罰則にもかかわら

ず、風水術に因る停柩不葬は人びとの習俗として近代にまで連綿と受け継がれてきた。それでは、なぜ庶民側は禁止にもめげず風水に従ったのか、一方、なぜ権力側はこのように躍起になって風水を謬妄であると弾圧したのだろうか、という問題が浮上する。それは第三章の権力循環論により明らかになるはずである。

なお、歴代の支配者は、人民には弾圧しておきながら、自らは風水術の粋を集めて死後の栄華を求め、その究極の墳墓が地下宮殿であった。ちなみに、文化大革命で名を馳せ、封建思想の革命（破壊）のリーダーであった、かの江青（毛沢東夫人）は、一九七一年到北京郊外にある明の十三陵（明代皇帝の地下宮殿）を見学した折、十三陵の景観を目のあたりにして「ほんとに風水宝地だねえ」と感嘆の声をあげたという（楊銀禄 2002:44）

II 墓地風水と真龍地

1. 風水と『葬書』

真龍地伝説の事例、毛沢東の祖父の墓、祖父と大叔父との墓地争い、八年に及ぶ埋葬延期等を前章においてわれわれは読んできた。伝説をはじめとしてそこに表白される、人々の墓にかける情熱と執念は、われわれを驚嘆させ、ある種の感動すら与えずにはおかない。では、人々をしてそこまで情熱をかきたてるものは何なのか、それは、墓地風水説である。良い風水の地点に先祖の骨を埋葬すれば子孫繁栄、帝王宰相も夢ではないという、予言めいた幸運話を、人々に納得させるだけの理論あるいは観念、それが墓地風水説である。

それでは、まず“風水”について。昨今では世界的ブームの様相を呈し、われわれの日常生活にもインテリア風水や花風水といった形で入りつつあり、——中国の大陸では、学術研究は盛んになっているものの、やはり迷信という規制が付くのか、日本のように商業ベースに乗っていない——風水の概説書だけでもおびただしい数にのぼる。ここではその基本のみをおさえておく。

風水は、宇宙の根源的エネルギーである「気」に関する実践的理論の一つであり、気を探し当てる技術である。具体的にいえば「人体という小宇宙の気と、周囲の自然や大宇宙の気を協調・統一させることによって、人体の健康と心理上の安定を保証し、そこから『滾滾財源』（こんこんと湧き出る財源）を獲得する力を手に入れようとするのである。」（何

曉昕, 1990:81)

「風水」という呼称の語源は、風水の基本經典といわれる『葬書』（『葬経』ともいう。晋代の方術家として名高い郭璞（276～324）の著書に仮託される）の有名な一節による。

「経に、気は風に乗ると散り、水にへだてられると止まると云う。昔の人は気を聚めて散らないようにし、気を通わせても止まるようにした。それでこのことを風水という。」（冒頭の「経」とは漢代の青烏先生の作といい、風水最古の經典とされるが、その真偽は不明）。

「風水」は、つまるところ気をめぐる風と水の攻防にある。すなわち具体的な地形（地勢）としては、強い風から気をまもり集めるための背後と側面の丘陵、気の出口にはそれをとどめる川という基本形をもとにして、さらに地中に流れる地気の勢い（龍または龍脈）を、丘陵の起伏や方位や水流との関わりから観察して、良い龍脈を探し当てる。このような技術が風水である。技術とはいえ、気の宇宙論をもとに様々なシンボリズムを駆使するために、西歐的近代知により、気を不可知の存在と決め付けられれば、一種の迷信の領域におちる危うさを持つものでもある。

ちなみに、中国思想史に対して西歐思想との比較を加味して論じた李沢厚は、気の陰陽説を「思弁理性ではなく、経験感性でもなく、ある種の実用理性である」としてその中国的特質を抽出し、具体的には、中国医学の経絡理論をとりあげている（『中国古代思想』, 1985:162-170）。経絡理論は、人体というミクロコスモスを主に扱い、風水は、宇宙というマクロコスモスの視点から人間の環境を扱うわけであるから、風水もまさに“実用理性”のなせる技といえよう。

風水が対象とする人間環境は、居住空間全般すなわち居室、住居、村、都市にわたるが、ここで注意すべきは、人間の居住空間に死者のそれも含むことである。これは人間が死後も先祖として祭祀されることにより生きるという、一種の靈魂不滅観念による。死者の住居は陰宅、生者のそれは陽宅という。風水は、上述の古代經典が『葬経』あるいは『葬書』と題されるように、陰宅風水すなわち墓地風水からスタートしたのである。そして今日でも、より良い風水地点に墓をたてようとする観念は根強い。ちなみに、自由化政策以降、GNPの発展と比例して墓の数値も右肩上がりとなった。中国の墓は伝統的に個人墓を原則とし、都市部には共同墓地があるが、

農村は自由選択であるため、その数の増大は計り知れない——ある山の南斜面は墓だらけという光景をわたしは目にすることがあるが、こうしたいわば墓公害、環境破壊ゆえに、政府の迷信撲滅運動の対象の一つに風水があげられるという側面がある。

さて、われわれの真龍地伝説の核心である、「真龍地（龍穴）に先祖の骨を埋めれば子孫が帝王宰相になる」のはなぜかという問題点に入ろう。この問いに対して、じつは先に引用した『葬書』が、冒頭で実に要領のよい回答を用意してくれている。

（一）埋葬とは生氣（生産的な気）を利用することである。

かの陰陽の気は吐かれて風となり、昇って雲となり、降って雨となり、地中で変化して生氣となる。生氣は地中で変化して、発して万物を生ずる。

（二）人は、体を父母より受け、もともと骸が、気を得て体となって父母の庇護を受けるのである。考えてみるに、生者とは気の聚まったものであり、気が凝結して骨となり、死ねば骨だけが残る。

（三）したがって、埋葬とは地中に気を返して骨を納め、それによって庇護を得ようとする方法である。『葬経』に「気が感応して、鬼（死者）の福が人に及ぶ」とある。

（番号と改行および括弧内は筆者。原文は注6参照）

（一）は気のコスモロジー、（二）は伝統的な生命観、（三）は人祖（生者と祖先）感応説をおのの表明しており、真龍地伝説に直結するのは第三段である。墓地風水の核心は、先祖の骨・埋葬地点・子孫（生者）という三者間の、気の運動による感応であるが、それを読むためには一段から始めなければならない。なお、『葬書』は昨今の風水ブームが陽宅中心であるためか、数ある風水書では、ほとんど取り上げられていない⁷。

気のコスモロジーをめぐる言説の一つに、『老子』の有名な一句「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」がある。第一段はこれのビジュアル版であろう。

宇宙万物は一元運行の気から成り、その「天下を通じて一気のみ」（『莊子』外篇知北遊篇）の一気が陰陽二気に分かれる。陰陽は、実体としての天地、男女、昼夜、動静などと二項対立的、相互補完的観

念として認識される。このような観念は、世界各地域に遍在し、人間の思惟活動の基本構造として、例えばレヴィ・ストロースの神話学などからも抽出されている。しかし、陰陽は、中国にあっては気の宇宙論に由来するものであり、単なる二項対立的観念に止まることなく、漢代の『易経』に集大成されたごとく、陰は基本、陽は主導という概念化・機能分担のもとに、対立、補完、相互依存、相互転化という、気の運動機能として分節化されかつ体系化されるところに、その本質がある。従来の陰陽をめぐる言説には、運動機能という用語は見られないようであるが、わたしは、後述の五行を気の運動形態とし、両者を対比して概念化する方向をとるものである。

さて、陰陽二気が、風、雲、雨となって天地をめぐる、「地中に行すれば生氣となり、生氣は地中に行して、発すれば万物を生ず」。この「地中に行する」の「行」はある方向へ「行く」というよりは「行う、はたらく、変化する」と読むべきと考える。その理由は、陰陽五行説の「五行」にある。

五行の「木火土金水」を、西歐的に「五元素」と固定化して論じられる傾向があるが、五行説の起源からいえば、例えば「水火なる者は、百姓の飲食する所なり。金木なる者は、百姓の興作する所なり。土なる者は、物の質生する所なり。これ人のために用ふ」（尚書大全）とあるように人間の具体的な営為の表象にすぎない。初期の「木火土金水」が、そのうち陰陽説と結合して理論化される（鄧紅，1995「陰陽五行篇」参照）。五行とは、わたしなりに定義してみれば、「陰陽二気の運動機能によって無限に分節化・実体化される、気のもつ五つの基本的な運動形態である」。その形態は、いわゆる五行表に見るごとく万物にわたるのである。したがって「五行」の「行」とは、気が運動してある形態に変化することを意味すると考えられる。

また、原文の記述自体から言って、「行」をある方向に「行く」と解釈した場合、「陰陽の気が地中に行って生氣となり、生氣が地中へ行って」となり、地中にある生氣がまた地中へ行くという矛盾が生じるのである。

さて、生氣が万物を生じたあとのこと、地上の万物の中で最も貴い存在であると、つとに漢代に董仲舒が位置づけた、人間のこと（鄧紅，1995:107）を取りあげているのが、第二段である。

「人は体を父母より受け、もと骸が氣を得て体となり、骸を受くる」は、三層になった意味を読むべきだろう。表層は、生殖レベルをいい、われわれは両

親により生まれたのである。中層は孝の観念による。父母から授かった命や身体を粗末にしてはならないというレベルである。基層は、中国的な生命観である。人の体（生命の具象）は、父母、ひいては先祖からの連続体すなわち一氣であることをいう。

中国の家族制度における宗族（父系血縁集団）は、「一氣一祖一姓」「一祖分派、同氣連枝」の原理を持ち、同姓の者は、一人の先祖から枝分かれし、一つの氣を共有するというわけである。いわゆる「同姓不婚」（同じ苗字の男女は結婚しない）や「異姓不養」（苗字の違う者は養子にとらない）の原則もこの「同氣」の観念に由来する。ちなみに女性が結婚しても夫の姓に変えないのは、自分の氣と嫁ぎ先の氣が異なる以上、変えたくとも変えられないのである。この一節の後半は、したがって、そもそも骸が、同祖同氣の氣を受けて体を成したのであるから、連続とつづく先祖の庇護を受けることができると読めよう⁸。

次の一節、「蓋し生者は氣の聚りにして、凝結する者は骨と成り、死すれば独り留まる」について。「生きている人間は氣の集まったもの」とは、氣の宇宙観からいえば、天地のすべてが氣の集合体であって、人間もその例外ではないことをいう。「氣が凝結したものが骨と成り」、というのは、前節との文脈から読めば、「一祖一姓一氣」の氣の凝結したものが骨であるから、骨は一族血統の、というよりは一族氣統の表徴となる。換言すれば、まさに「骨は出自なり」である。

さて、肝心の第三段である。「故に葬者は氣を返すに骨を納め、以って骸を生ずる所の道なり。經に曰ふ『氣は感ずれば応じて、鬼福の人に及ぶ』と」。

まずわれわれの関心を引くのは、ここに見られる極めて現実的かつ合理的な発想だろう。埋葬つまり墓をつくることは、死者への追悼や記念のためではなく、生者が死者の庇護を得る手段である、と断言してはばからないのだ。

それでは、なぜ生者が死者の庇護を得ることができるのか。それはそもそも地中の生氣によって万物が生じたのであるから、人間も死ねばその氣を地中に返すために、一族氣統の表徴である骨を埋めるのであるが、もし骨を地中の生氣（地氣）の集った地点（風水宝地）に埋めることができれば、死者は福（格別にすばらしい生氣）を得ることができ、死者の氣と同氣である子孫の氣とが感応して、その福や生氣が子孫に送られ、ひいてはその生氣が子孫に富貴榮達を果たさせるのである。

ここでの第一のキータームは「感応」である。この観念は、墓地風水に限らず中国のコスモロジーを論じる際、避けては通れない重要性を持つ。「感応」を中国固有の思考として重視したJ. ニーダムは、大著『中国の科学と文明』第13章「中国科学の基本的思想」において、中国の伝統的な科学理論の中核である五行説の象徴的相関関係に見られる固有の思想を、ヨーロッパ科学の外的因果律による「従属的思想」と対比させて、「同格化思考」「連想思考」と呼び、キータームとして「感応」を取り上げている。

「諸概念は互いに包摂されるのではなくて、パターン(有機体)の中に(同格に)並んでおかれ、事物は互いに機械的な因果律の作用によってではなく、一種の“感応”によって影響する」(訳本第2巻321)

「同じ種類に属する事物が、互いに共鳴するか、あるいは活気づけるといふ考えは、中国思想特有の物であったが、ギリシャにもなかったわけではない。」(同326、傍点は筆者)

「感応」を、ユング心理学で言う共時性(synchronicity)に置き換えるのも、感応を読むための一つの方法とわたしは考える。ユングの共時性に関する最初の論文は、「非因果的関連の原理としての共時性」(1951)というが、この題目にある、“非因果的関連”すなわち心理的事象の流れと物理的事象の流れとの間の非因果的対応が、感応であるといえる⁹。『葬書』の文脈でいえば、富貴を願う子孫の心理的事象が、死者の骨という物理的事象との間に非因果的関連があるというわけである。ともあれ、気存在を認めない西欧的発想によると、「感応」の言説は、ひどくまわりくどいものとなるのは否めない。

つぎに第二のキータームは風水宝地であるが、これは、真龍地伝説では、枯枝をさすと芽がでる、あるいは卵を埋めると雛がかえると語られるように、蘇生、再生、生命の誕生を果たしうる、いわば奇跡の地点である。また「ブーグオウの恩返し」では真龍地を「嫦娥奔月」(嫦娥が月に奔る)の「穴位」と命名している。

女神の嫦娥は、古代神話と後世の神仙譚におけるメジャーな存在であり、崑崙山の西王母のもとから夫がもらった不死の霊薬を、ひそかに飲んで月に逃げ、月神になったなどと様々に伝承されるが、その核心部分は、嫦娥が不死身になって月宮に昇ったゆえに、月が満ち欠けを繰り返して不死の存在であることの説明機能を持つことである。従って「嫦娥奔月」

の穴というのは、不死をイメージして吉祥を意味する。また嫦娥は豊饒の女神としても語られる。例えば「嫦娥は月宮に昇ったあと、桂の樹を一本植えるが、桂は三十六年ごとに、二枚の葉を下界に落とす。葉がはげ山に落ちるや、はげ山は果樹の生い茂る山となり、葉が大海に落ちれば、大海には魚貝が満ち溢れ、葉が田畑に落ちれば、五穀豊穡となる」(姜彬 1992:258)。従って「嫦娥奔月」の穴とは、不死と豊饒を敷衍して子孫繁栄を意味すると読むことができよう。

ところで、あの世(先祖)の骨の気が、この世の子孫の気に感応するという観念を、ここで名付けるとすれば、祖人感応説(祖先と人間の感応)の用語も考えられるが、生きている人間が、風水宝地をさがしだして先祖に提供するという、人間の主導性があるゆえに“人祖感応説”としたい。これは墓地風水説よりも古い天人感応説(天と人の感応)の応用といえ、終章で扱うことにする。

2. 墓をあばく

『葬書』をテキストとして墓地風水説の基本原則を読み、それにより風水宝地の最高地点である真龍地に先祖の骨を埋葬すれば、子孫から帝王宰相が出るというそれなりの理屈、すなわち理論的枠組みは理解できたわけである。それでは、真龍地に一度埋めてしまえば、富貴栄達は必ず実現するかというと、ことはそれほど簡単にはすむはずがないのである。その行く手には“墓あばき”が待っているからである。

墓をあばくことは、中国の伝統指標の一つと考えられる。墓あばきには三種を指摘できよう。

まず副葬品目当ての盗掘は昔のことはいうまでもなく、現在においても、九十年代前半全国的に続出してユネスコも取り上げたほどである¹⁰。これはそもそもは人々の他界観にその原因があるだろう。死後の世界を生前の世界の写しと考えるために富貴の者は、死者のあの世での生活の安逸を願って副葬品をはりこむのである。一般には紙銭を焼いたり、紙でつくった大邸宅(昨今ではテレビ、冷蔵庫、カーポートまでつく)の模型を焼いてあの世に贈る。

第二は、仇討ちと同義の墓あばきである。春秋時代の楚の伍子胥が、父と兄を殺した平王の墓をあばいて、屍を三百回も鞭打った話はあまりにも有名である。既述のごとく、骨は一族血統の表徴であるから、それを鞭打たないまでも、骨を地表にさらして踏みしだくことは、相手の一族血統を先祖から子孫

まで辱めることになり、恨みをはらす最高手段となる。恨みによる墓あばきの観念は現代にも活きている。八十年代、改革開放路線を打ち出した鄧小平の片腕といわれ、その後継者と目された胡耀邦党総書記は、89年失脚し、逝去後、墓をあばかれている。わたしが聞いた話では、河南省安陽にある胡耀邦の墓は、近くに住む、六〇歳すぎの農民の手によって3月31日にあばかれた。その理由は、改革路線によって自分がこうむった不利益のはらいせによるものという。89年、天安門事件のそもそものきっかけが、胡耀邦の突然の失脚と逝去への人々の追悼にあっただけに、この墓あばきの話は、衝撃波となって全国に伝わったようだ。

第三は、風水破壊の墓あばきである。風水宝地に埋葬された遺体、つまり骨を宝地から取り出してしまえば、その骨が、宝地から受けていたすばらしい地気・生氣はストップし、したがって子孫の富貴栄達も御破算となる。毛沢東の祖父の墓があばかれた理由が、この風水破壊にあったことはいうまでもない。

毛沢東の祖父の墓にまつわる墓あばきは、様々に伝承されているが、ここではまとまりのある一例を紹介しよう。なお、この話の歴史的背景に触れておくと、毛沢東は一九二七年から江西と湖南の省境の丘陵地帯・井冈山に革命根拠地を樹立し、そこから、朱徳を総司令とし自らが政治委員をつとめる紅軍によって、二度にわたり（29年・30年）長沙を攻撃している。

1930年10月、国民党部隊は、江西省での赤軍包圍壊滅作戦において負け戦ばかりだった。湖南省省長の何鍵はこう考えた、この負け続きの元凶は、毛翼臣の長孫・毛沢東だ。あやつが江西赤軍を指揮しておるからだ。そうして、参謀長で自分の義兄弟でもある呉凱南を呼び出し対策を協議した。風水学をかじったことのある呉凱南は、沈思黙考、ややあって自信たっぷりと言った。

「われわれが毛沢東の足下に連敗を喫した、その原因は、毛家の祖墳の風水のすばらしさにありますぞ。毛沢東がかくの如く強運（原文は『硬気』）の原因は、祖墳が気を貫いておるからであります。毛沢東に打ち勝ち、共匪の全滅をはかるためには、毛沢東の祖墳をあばき、その龍脈を断ち切らねばなりませんぞ。」

こうして、細かい打ち合わせのあと、何鍵は、

腹心の部下の熊道乾に一連隊の兵士を率いさせて韶山に派遣した。

それは、ある真つ暗闇の晩のこと、数十名の実弾をこめた銃を担いだ国民党の兵隊どもがやってきて、まず湘潭西部二区の国民党支部に立ち寄った。そこで区長の李性恂から、毛沢東の祖墳地点の調査情況について報告を聞き、そのあと闇に紛れて密かに滴水洞の方向へと出発した。

ところが、なんと、思いも寄らないことに、韶山沖に踏み込んだ途端、あっちこちから、コラーッと怒鳴り声、ダーンと銃声、ジャンジャンとドラの音、ガンガンとドラム缶の音が沸き起こった。しかも、どんどんひどくなっていく。蒋介石の兵隊どもは度肝を抜かれ、もう、どうしていいかわからず、ばらばらに逃げ出した。しばらくして兵隊どもは三人、五人とかたままって、韶山の永義亭に逃げ込み、なんとか一同揃ったのだった。そこでスパイが言うには、あのドラや銃の音、怒鳴り声は、夜中に山でサツマイモを見張る農民がさわぎ立てたもので、じつはイノシシを追い払うためのものだと。

それを聞いた兵隊どもは、ほっとひと息入れ、それから、もう一度、鉄砲や刀を持ち、鋤をかついで、こわごわ韶山沖に潜り込み、やがて滴水洞の大石鼓の尾根に登りついた。着いたそのとき、眼の前に白い布が置いてあり、布に一行こう書いてあった。

「前方の大石鼓に似た墓こそが毛沢東の祖墳であるぞ」やつらは、それとばかり、前の墓に群がり、先を争って掘り始めた。掘って掘って、とうとう棺おけを掘り当てあばいた。そうして、見るも無惨な白骨のひとかたまりをあばきだしたのだった。

これを指揮した熊道乾といえば、もう勝利の美酒に酔って意気揚々と長沙に帰った。省長ターレンのおほめの言葉にあずかり、ごほうびをたくさん頂戴した。もう飛ぶ鳥を落とす勢いである。彼は掘り当てた白骨を酒瓶に入れ、人々に見せびらかして言うのだった。

「そもそも十年たった骨と百年たった骨とは見てわかるものでしてな…。」

ところがである、長沙に戻ってまもなく、熊道乾は夜ごと、悪夢にうなされるようになった。あの青白い白骨が飛び跳ね、あの丸い頭蓋骨がむせび泣く。彼はもう昼も夜もびくびくとして、

恐怖症にかかってしまい、ついには気がいのようになって沅陵にある故郷に引っ込んだ。解放後、人民裁判にかけられ処刑されたのだった。

墓があばかれた数年後、毛沢東はこの事について言った。

「何鍵が戦術と称したのは、勝てなければ、文字通り墓穴を掘るというものだ」と。

何鍵はたぶん死ぬまで知らなかったことだろうが、じつは1930年にあばかれた墓は、毛沢東家の祖墳ではなかったのだ。それは地主の毛俊賢の家の墓だった。こうなったのは、村人が地元の共産党組織の指導と作戦のもとに、とくにそれなりの準備をしていたからだ。まず、毛沢東のおじいさんの墓碑を地中深くに埋めて隠し、さらに墓の土まんじゅうを平らにして、その土に草を植え、周りの草むらと寸分違わないようにし、なんの痕跡もなくしたのだ。そのうえ、例の銃声やドラによる「イノシシ追い」も演じたのだった。

ところが、さらに意外なことにあれから半世紀もたった1986年に、あの墓碑——長さ1メートル、幅50センチのありふれた祁陽石の碑が、遊歩道を造っている時たまたま掘り出されたのだった。(高菊村ほか、1993:80-82)

墓あばきまつわる伝承については、『盜墓史』(殷嘯虎ほか、1997)が、説話集の『搜神記』(4C)や『子不語』(18C)などから事例を挙げ、かつ分類紹介しているが、それら5つの分類項目は、さらに二大別が可能だろう。一つは盗掘失敗の類である。掘る過程で、墓を守る蜂や大蛇に撃退される、あるいは嵐が吹きあれるなどの異変がおきる。二つには、首尾よく盗掘したもの、上述の毛沢東の祖父の墓の例のように、盗掘者が死に至るものである。いずれの例も盗掘を戒め罰する内容であることに変わらない。これらの事例のなかに、復讐のための墓あばきの例が見あたらないが、それは、復讐目的が、盗掘の範疇に入ることなく、また懲罰の対象外におかれたことを示唆するものかもしれない。

いっぽう、墓を造り守る側についていえば、中国の皇帝たちが壮麗な地下宮殿を造営しながら、それがあばかれないよう如何に秘策を練ったかは、始皇帝の例でよく知られる。現代になっても、その伝統は変わらない。中華民国初代総統・孫文の墓である南京の中山陵、その建造物の宏壮さは、観光客として訪れる外国人を驚かさずにはおかない。台湾の蔣

介石の中正陵も然りである。

毛主席記念堂にいたっては、北京城の南北軸をなす故宮(紫禁城)の中心軸上に位置する、すなわち首都の最上級の風水宝地を占め、なおかつ警護兵に二十四時間守られている。

また、周恩来、劉少奇、鄧小平は、遺言により墓はつくりなで散骨の埋葬方法をとっているが、これは墓をめぐる伝統を考慮しての措置と思われる。

Ⅲ. 天人感応と人祖感応

1. 毛沢東の感生帝伝説

毛沢東は、現代政治におけるカリスマの典型であった。カリスマによる支配について、かつて、ウェーバーは支配の三類型を提起し、依法的支配と、支配権力の神聖性にもとづく伝統的支配とともに、支配者のもつ天与の資質によるカリスマ的支配を第三の類型とした。

これに対してアンダーソンは『言葉と権力』の中で、ウェーバーの三類型を批判して、「総ての伝統的な権威はカリスマ的であり、総てのカリスマ的権威は伝統的である」(111)とし、ウェーバーの誤りの原因は、「カリスマ的リーダーが出現する社会的、経済的・政治的条件とその性格に自分の関心をあて、カリスマに従う人々の文化には関心を持たなかったからである」(105)と論じた。

われわれのフォークロアは、まさに“カリスマに従う人々の文化”を研究対象とするが、現代におけるカリスマ的支配者であった毛沢東はフォークロアにおいて、たとえば本稿の真龍地伝説一つをとっても、伝統的支配者となんら変わるところなく、アンダーソンの主張を裏付けることとなった。

ところで、ここでの関心はカリスマの原義である。「ギリシア語で神から与えられる『賜物』を意味する語」(岩波『哲学思想事典』)であって、主に新訳聖書の中で使われるという。また「賜物」は神の「恩寵」と置き換えることができる。この場合、与える神は天の存在であり、カリスマの持つ力は「天与の資質」と表現される。

中国におけるカリスマ的権威は、本稿で扱った真龍地伝説の墓地風水説では、地気と地中の先祖の福(鬼福)によってもたらされるのである。では、「天与」の側面はどうか。これは、中国の帝王が、「皇帝」の呼称とともに「天子」のそれを合わせもつゆえに言わずもがなのことではある。俗なる政治的権威の「皇帝」の呼称よりもはるかに早く、聖なる宗

教的権威である「天子」の呼称は生まれ、それは、周代（前11～前3世紀）初頭に、人間の王が、中国パンテオンの最高神である「天（天帝）の子」であり、「天の命」を受けたものであると概念化されて、周王朝王権の絶対化の理論的装置となったのである（張光直『中国青銅時代』363,414）。秦・始皇帝の大改革とその失敗を経て、中央集権専政の漢帝国になると、王権のさらなる神聖化、強大化が企てられ、「天子」の出自が「感生帝」の名のもとに語られる。感生帝とは「感じて生まれる帝」すなわち「天の感応を受けて誕生した帝王」をいう。古代神話上の聖王も新たに感生帝に位置づけられる。たとえば、次のようである¹¹。

「姚氏が華（帝舜）を縦（生）めるは、樞（北斗星）に感ぜるなり」（尚書緯帝命驗）。

「扶都は、白氣の月を貫けるを見、感じて黒帝湯（殷王朝初代天子）を生む」（河図握矩記）。

「大任は、長人の己に感ずるを夢み、文王（周王朝初代天子の父）を生む」（詩緯含神霧）。

これら緯書（儒教の經典では扱われない不可思議な現象を記述したもの、漢代に流行）の記述は、最後の一つを除いて、文法上は人間の女性が天界の日月星辰に感じて帝王を生んだことになるが、天は宇宙の主宰者であるという、天の位置づけからいえば、それは女性の意思とはかかわりなく、天の存在が発信する動き（中国的には「天の氣」、西欧的には「神の恩寵」）におのずと感応したと読むべきであろう。

このような感生帝伝説は、歴代王朝公認の正史である二十四史に枚挙のいとまのないほどに記録されている——出石誠彦「支那帝王説話に対する一考察」（1935年）には、じつに百六十余种が列挙される。感生帝の研究は戦前には、この出石論文や森三樹三郎「帝王の感生伝説」をはじめかなり行われていた。しかし、本稿のように人祖感応説との対比による論考はほぼ皆無と思われる。そもそも人祖感応なるものは、わたしの試みの造語なのだから。

さて、毛沢東であるが、彼も歴代帝王同様に感生帝として語られる。わたしの手元には六種の資料があるが、ここでは二つ取り上げてみよう。

聞くところによれば、母の文氏は毛沢東を身ごもったとき、夢に蛟龍が舞い飛ぶのを見たという。

また、毛沢東が生まれるときのこと、真っ昼

間に、突然、天からキラキラと目を射る白熱の丸いかたまりが落ちてきて、近寄ろうにも近寄れなかったようだ。

毛が生まれるときのこと、季節は冬至の年末というのに、にわか風雨が激しくおこり、稲妻が走り、雷鳴がとどろいたという（黎宛冰、1993:5）。

これは、典型的な正史タイプの感生帝伝説である。夢の中における天界の靈威との感応を記し、そのあと誕生時の奇瑞を様々に描くのである。母の文氏が「夢に蛟龍の舞い飛ぶのを見て」毛沢東を身ごもったとはどう読めるのか。この一説は、最初の正史である『史記』（前一世紀）に記録された、漢帝国の初代皇帝、高祖・劉邦（在位前206～195）の感生帝伝説を下敷きにしたと推測される。

（高祖が生まれる前のこと）、劉媪（劉邦の母）が、あるとき大きな沢の斜面で休んでいて、夢に神に遇うのを見た。このとき雷鳴がとどろき、天はにわかにかきくもった。太公（劉邦の父）が行って見ると、蛟龍が劉媪の上に乗ったのだ。劉媪はすでに懐妊しており、やがて高祖を産んだ。

高祖は生まれつき鼻が高く龍顔で、ひげが美々しく、左股に七十二のほくろがあった。（中華書局版『史記』2、高祖本記 341）

この話の一般的解釈をいえば、「漢の高祖（劉邦）は母が龍と交わって身ごもった子であり、そのため高祖の額は龍のようであった」（荒川紘『龍の起源』1996:19）。しかし、はたして現今の昔話研究の異類婚姻譚的読み方ですませられるのだろうか。この解釈では、原文の「夢に神に遇うのを見た」は無視して素通りしてしまうことになる。

テキストは二千年も昔の古文獻である。それなりの手順が必要であろう。また、正史の感生帝伝説（出石論文列挙の160種）の中では、人間と龍との交合の事例は、わたしが吟味したところでは、一例たりとも見当たらない。これは、中国の龍の本質に関わる重要な問題である¹²。

まず原文の「蛟龍」（虎頭蛇体で大きいのは数丈に及ぶ龍または鱗のある龍）であるが、史記の一段とはほぼ同様の記載のある『漢書』高帝紀では「交龍」と記されている。「交龍」とは、つとに40年代に著名な神話学者・聞一多が「伏羲考」の中で「交合す

る雌雄二龍である」と指摘した——漢代の画像石には交龍の図像は多い。したがって、『史記』の「蛟龍」の意味内容は、「交龍」と読むべきであろう。

また天界の龍一般(水界の龍は別次元)に関して、ハーバード大学の考古学者・張光直の説をとって言えば、龍はそもそもは古代シャーマンを補佐する動物(祭器に刻された動物紋様の神獣)の一つであり、龍は、一對の龍(両龍)として装飾される。その後、天・天帝に仕え天地を往来する、いわば通天神獣として定着する。ときには神々の天地間の往来の際の乗り物の役目を果たすものとなった(張光直1982, 第12, 13章, 1983, 第3, 4章, 傍点は筆者)。

このような龍の文化史をふまえて、『史記』と『漢書』の一段の要点を読めば、「高祖・劉邦の母は、天から両龍に乗って降ってきた神に夢の中で遇った(感応した)。このときにわかに雷鳴がとどろき、高祖の父が行って見ると、その両龍が「交龍」の姿で、すなわち陰陽(男女)交合を象徴する姿となって、母の上の方にいた。高祖は、天の使いである神龍の風采をそなえていた」となる¹³。

したがって、毛沢東の出生奇譚の一節「夢に蛟龍が舞い飛ぶのを見て身ごもった」とは、「天の使者である両龍が、なんらかの天の神霊とともに降ってきて、その神霊と毛の母との感応すなわち懐妊を表象して舞い飛ぶ」という読みが可能となる。

次は、毛沢東の感生帝伝説の第二の事例である。

天帝はひどい災いに苦しむ中国をあわれみ、「白額虎」に、もう一度、下界に降りて東方の雄鶏を救うように命じた。この白額虎は、かつて千年以上も昔のこと、天命を奉じて、天波楊府(楊將軍家)に入って、投胎し、楊令公の六番目の息子・楊六郎(楊延昭)に生まれ変わった。

それから一千年ののち、韻山沖のある農民の家で、女房が今まさに最初の息子を生もうと、難産に苦しんでいた。その二日前の晩、女房は夢を見た。白額虎が眼をランランと光らせ、自分にとびかかってくる、と、そのとたんハッと眼がさめた。そこから陣痛がはじまり、一回また一回と激しい痛みに襲われた…」

(94年2月、筆者が北京の学生に依頼して、耳にした話を書いてもらったもの)

この話には、ひどく人格化された天帝が登場し、興味あることに、宇宙動物(東西南北のいわば守護

神としての四獣)の一つで、西方を守る白額虎(白虎)の化身として、毛沢東の誕生が語られる。白虎と毛沢東の関わりを調べてみると、それは彼の星まわりによる。すなわち、誕生日(旧暦11月9日)から割り出した宿星がスバルであり、スバルは、天球二十八宿において、西方七宿の距星(中心となる星)であるから、白虎星さらに、白虎神と言い換えることができる。この白虎は、宋代に異民族の侵略と戦って功績のあった楊將軍家(第一章で既述)の息子に生まれ変わったことがあるというから、毛沢東への転生は、毛沢東が、日本など列強の侵略と戦い勝利したことを、楊將軍家のそれと重ねたうえの伝承者の心象であろう。

ともあれ、以上の、感生帝伝説にみる天人感応は、あくまでも天主導型である。天命・天意が、下界の人間に感応する現象を気の流れにたとえれば、「天→人→天」となる。後半分の「人→天」もまたかなり物理的かつヴィジュアルなものである。すなわち、天意により下界に生まれた人間は、死後、天に帰ると認識される。ちなみに『水滸伝』などの英雄豪傑は、出自が、天界の様々な星辰であって下界に降り、死ぬと天界に帰っている。私のフィールドワークでは、河北省石家荘地区のある村で、毛沢東は天に帰っていると噂されていたし、毛の生誕百周年の93年当時には、蒋介石も天に帰っていて、天界で国共内戦の続きをやっているという噂も、各地で耳にしたのであった(加藤千代, 1996:30-31)。

天人感応説の気の流れに対して、真龍地伝説の人祖感応説のそれは、すでに『葬書』に沿って解説したように、この世の生者が、あの世の死者(祖先)の気を利用して生気を獲得し、そして子孫繁栄を企てるわけだから、現世の生者の願いという、いわばある種の気が発し、その流れは「人→祖先(地中)→人」になり、天人感応とは、対極をなす人間主導型である。

両者の比較から明らかなように、人々にとって感生帝の方は、天からの一方的な働きかけゆえに、坐して幸運を待つしかないが、真龍地の方は、自らのそれなりの努力によって幸運をつかむことができるのである。毛沢東の祖父と大伯父が、風水宝地をめぐって兄弟争いを演じた原因については、以上のような墓地風水の原理からわれわれ異邦人もそれなりに理解が届くことになった。しかしながら、真龍地伝説が長大な歴史の中で伝承されてきた風景には、近景の墓地風水のほかに、次の二つの伝統指標を、遠景として描き込む必要があるだろう。

第一点は、権力循環論(五徳終始説)、第二点は、祖先祭祀のあり方である。

2. 権力の循環

権力循環説は、前章で既述の陰陽五行説の中の五行説によって、王権の交代を説くものであるが、実態としては予言や占いの要素が強い。五行循環説とは、今日でもよく知られる相生相克理論である。この理論はもともと人々の日常生活経験に基づく。相生の循環といえば、木は木同士をこすれば発火し、火(燃える物体)は燃えつきて灰となって土に帰り、土はその地中に鉱物(金属の原料)を有し、金属は冷えれば水滴を生じ、水は植物(木)を生育するというわけである。相克(相勝)の循環も、同様に水は火を消し、火は金属を溶かし、金属は木を伐ることができ、木は農機具として土を耕し、土は堤防となって水をさえぎり止める、という生活経験の思考、つまり李厚沢のいう実用理性による理論である。

この相生相克の五行循環説を、王朝交代の正当化に活用したのが、五徳終始説である。陰陽の消長・対立の機能に基づいて、天命を受けるべき有徳の士の徳を、五行の徳(木徳・火徳・土徳・金徳・水徳の五徳)に分節化し、相生相克理論によって王権の循環を説くものである。

この権力循環説が、蒋介石は火徳、毛沢東は水徳といった具合に現代にまで保持されたのは、一つに相生相克理論が、その平明さを持って一般庶民にまで浸透していたこと、二つには、さらに重要なこととして、中国王権が、陰陽五行の循環により誰でも貧富貴賤を超えて掌握できるという平等性を持つことによる。この平等性こそが真龍地伝説の根底を支え、天人感応説の天からの働きかけをただ坐して待つのではなく、自らの努力によって玉座を占める可能性を説く人祖感応説を展開させたといえよう。

第二の祖先祭祀のあり方は、他界観に関わる問題である。人は魂魄より成り、死ねば魂は天に帰り、魄は地に帰るといえるが、この魂魄の表現は、陰陽の二元論に依るもので、魂は精神を司る陽気を言い、魄は肉体を司る陰気を言う。天は陽、地は陰の二項対立により、人は死ねば、魂が天に帰り、魄が地に帰るといふ一種のレトリックである。西欧的な精神と肉体の関係にあるのではなく、魂も魄も気であることには変わりなく、一元運行の気として不滅である。

したがって、死後の魂魄の住処としては、天あるいは空中にいる魂は、自らの位牌(一族の家廟に置

かれる)に依りつき、地中の魄のそれは墓(骨)である。なお、先述の、天命により地上に降って生まれた人間は、死後天に帰るといふ言説との関連でいえば、魂魄といういわば二魂思想に対して三魂思想が存在する。死者の靈魂は三魂に分かれ、一つは自らの墓、一つは自らの位牌、もう一つは現世の写しである冥界において生きる——大部分の人間は冥界において子孫の供養を得ながら現世と同じように生きるが、ごく一部の人間すなわち天意により生まれた人間や偉業を果たしたもの、他者のために犠牲となった者は天に行って神となるというものである(コーエン、1988:210-211)。

祖先祭祀は、二魂と三魂を問わず家廟(祠堂)の位牌と墓という二カ所で行われる。フリードマンは、墓と位牌の関わりを次のように位置づける(丸括弧内は筆者)。

「骨としての祖先は陰である。それは地に属し、受動的で内向的である。位牌の中の祖先は陽である。それは天との親和性があり、能動的・外向的である。風水は陰を、祖先崇拜は陽を扱うのである。」「祖先崇拜において人々は、共通の祖先への敬愛を捧げるべく仲良く強調し合い、共同の活動の下で団結しなくてはならない。」「これに対し、埋葬の風水では、人々は祖先達から解放されて、狭隘な個人の利害を無秩序に追及することに没頭するのである。」「なぜなら良い風水を持つ場所は限られている。(一一ちなみに青島先生『葬経』には「一墳榮盛、十墳孤貧」、注に曰く「一穴が真ならば諸穴は虚間」とある。))」「人々が皆同様に繁栄することはあり得ない。各人は自分の親族の富や地位を抑えることによって自分のそれを向上させようとせざるを得ない。」「もっとも熾烈な競争は兄弟間に見出されるのである。」(フリードマン 1966:180-181)

この説には、フィールド調査者から若干の批判が出されている(渡辺、2001:68-79)が、毛沢東の祖父と大伯父の墓地をめぐる兄弟争いは、この説の正当性を証明する事例である。さらに、韶山・毛一族の祠堂「毛氏宗祠」と、そこに安置される位牌群もまた、この説を具象化するものである。

毛氏宗祠(創建は乾隆28年、1764)は、毛沢東の生家のある村「韶山冲」の中心地点に位置する。現在の韶山冲では、毛沢東記念館、毛沢東図書館、毛

沢東像など西洋的な巨大建造物が点在するが、その中にあって、ひときわわれわれの眼をうばう、伝統的な美観をもつ宏大な建物が毛氏宗祠である。かつて、毛沢東の幼年時代には、ひなびた山あいのありふれた農村風景のなかに宮殿のごとく屹立し、まぎれもなく毛一族の、外部に対する勢力誇示と内部に対する結束力の象徴であったと想像される。

毛氏宗祠は、内部の奥行きが三棟分あり、その最奥部のもっとも神聖なトポスである「敦本堂」（「本」である先祖に恭々しくするの意）に黒色の位牌が立ちならび、長幼の序・男女の別をともなう位牌群は、一族の協調と相互扶助による、秩序ある共栄の表徴といえよう。

きらびやかな宮殿にも比すべき祠堂の中に安置される位牌群が、祖先祭祀の陽の部分を含め、骨を埋めた個人墓は、たしかに陰の部分を含めるのであるが、それにしても、毛沢東の祖父の墓は、陵線上に輝いていたのだと、その光景がわたしの脳裡に蘇るのである。

おわりに

従来、中国帝王伝説の典型として論じられてきた感生帝伝説、その伝承の由来する天人感應説は、思想史の上では前漢の儒家・董仲舒により、陰陽五行説や儒教倫理に結合されて、天と人間の双方向性が強調される天人合一理論に飛躍する。しかし、感生帝のフォークロアにおいては、一方的な天主導型が保持されてきたといえる。これに対し、真龍地伝説の由来する人間主導型の人祖感應説は、墓地風水というある種の技術を通して、権力の循環を基層の人びとが自らの手にたぐりよせる、その可能性を平等に与えてきた。そこに真龍地伝説が中国という長大な時空のもとに伝承されてきた要因が見い出せよう。

注

1. 鐘敬文論文（1930）では、「天子地」という用語が使われているが、わたしの手元にある伝説資料には「真龍地」の表現のみが見られるため、本稿ではこれを使うこととする。なお鐘論文は、真龍地伝説を論じたものではなく、その前段の神婚モチーフをテーマとしてとりあげている。
2. 千野論文「三輪山神婚譚と中国の王朝始祖譚」も上記の鐘論文と同様、真龍地伝説に言及しているものの、テーマは神婚譚である
3. 走馬鎮と工農村については、加藤千代『『龍門陣』採訪ノート——重慶市九龍坡区走馬鎮工農村』（『地域文化の動態研究』平成6年度広島市立大学特定研究報告書）を参照されたい。
4. 「道士」と村びとから呼ばれているが、道観所屬の道士と違い、主に葬儀をとりしきる。書道もおさめ、正月の対聯（めでたい文句を赤い紙に書いたもの）をつくり村びとに売るといふ。
5. 先祖の骨を崖や水中の龍の口に入れたり、角にかけたりするモチーフに関しては、明石貞吉『『老頼稚伝説の安南異伝』の靈物と天文との関係に就いて』の中に、天球二十八宿の東宮七宿（龍の姿をもつ）に属する、角宿（おとめ座の α ・ ζ 星。天の門を意味する）と亢宿の大角の三星は、史記の天宮書の中で法官・將軍・帝座と位置付けられるという指摘がある。
6. 葬者乘生氣也夫陰陽之氣噫而爲風升而爲雲降而爲雨行乎地中而爲生氣生氣行乎地中發而生乎萬物人受體於父母本骸得氣遺體受靈蓋生者氣之聚凝結者成骨死而獨留故葬者反氣內骨以蔭所生之道也經云氣感而應鬼福及人
7. 渡辺欣雄 2001『風水の社会人類学』第6章第一節203～215に、『葬書』の冒頭部分の解釈があるが、それは台湾の研究者の注釈の訳出を主としたものであり、テキストに沿った読みとは異なる。また気の説明である第一段の「夫陰陽之氣～行乎地中而爲生氣」を省略している。葬書の基本的観念は気であるから、この部分の省略は不適切とわたしには思われる。
8. この一節「人受體於父母，本骸得氣，遺體受蔭」についてほかの解釈では、人のからだは父母や祖先から授かるが、そのからだの骨が子々孫々にわたって気を受けるのであり、からだを受け継いだ子孫こそ、風水の恩恵にあずかることになる」（渡辺欣雄2001:205）とある。これは子孫を軸とした読みであるが、原文の（一）から（三）にわたるコンテキストからいえば、現在と過去を軸にすべきだろう。また「蔭」（庇護）を「風水の恩恵」とするのはいささか飛躍と思われる。
9. 「共時性」に関するわたしの理解は、主に定方昭夫『『易』心理学入門——易・ユング・共時性——』第四章「易と共時性」によるものであるが、この本では「感應」には言及されていない。わたしがあえて感應と共時性を重ねてみたまでである。
10. わたしは1994～95年にかけてユネスコの無形文化財保護のプロジェクトに外国人専門家として関わり、ユネスコ北京事務所に入出入りしていたが、その時に河南省などの文化局の役人が盗掘防止の陳情に訪れていた。また殷嘯虎・姚子明『盜墓史』には、その具体例があげられている（P.2）。

11. 三種の引用は、森三樹三郎 1969:157を参照したものであるが、同様の事例は、安居香山 1979 第3章「感生帝説の展開と緯書思想」にも引用されている。
12. 正史の記述とは別に、緯書では、たとえば「慶都が赤龍と合昏し、赤帝の伊祁を生む。堯なり」（詩含神露）のように「龍との合婚」が記述され、「龍媪は龍との結合によって劉季を産んだとするのが、緯書の説なのである」（安居香山1969:128）。「合昏」を現実的な“交合”とする解釈に従えば、“感応”のカテゴリーからずれて、「感生帝」の概念からはみ出してしまふ。
13. 史記・高祖本記の高祖出生譚の読み方について、「蛟龍」を「交龍」とする解釈は劉志雄・楊静榮『龍与中国文化』（1992）にもみられる。ただし、その解釈では、神と劉邦の母が「感応」するのではなく、神が劉邦の母に「投胎」したので、劉邦は神の「転生（化身）」であるとする（P.274）。しかし、「投胎」や「転生」の観念は、仏教伝来後の観念であるため、「感応」と読むべきと考える。
- 引用文献**（中国人名は、日本語音読み）
- 明石貞吉 1935『『老嫗稚傳説の安南異傳』の靈物と天文との關係に就いて』『民族学研究』1巻2号 日本民族学会
- 荒川絃 1996『龍の起源』東京 紀伊国屋書店
- アンダーソン、ベネディクト 1990 中島成久訳 1995『言葉と権力—インドネシアの政治文化探求』東京、日本エディタースクール出版社 Anderson, B.. *Language and power*, Cornell University
- コーエン、マイロン L. Cohen M. L. 1988 長尾佳代子訳 1994「魂と救済—中国民間宗教における背反する主題」『中国の死の儀礼』東京、平凡社 Watson, J.L., Rawski, E.S.ed. *Death Ritual in Late Imperial Modern China*, University of California Press
- デ・ホロート 1892-1910 牧尾良海訳 1986『中国の風水思想—古代地相術のパラード』東京、第一書房 (de Groot, *The Religious System of China* の一部抄訳)
- フリードマン、M. 1966 田村・瀬川訳 1987『中国の宗族と社会』東京 弘文堂 Freedman, M.. *Chinese Lineage and Society*, London Athlone Press
- 范曄 南朝宋 5C『後漢書』巻75 中華書局
- 今西龍 1930『朱蒙伝説及老嫗稚伝説』『内藤博士頌寿記念・史学論叢』弘文堂書房
- 出石誠彦 1935「支那の帝王説話に対する一考察」『支那神話伝説の研究』1943 中央公論社
- 何曉昕 1990 宮崎順子訳、三浦國雄監訳 1995『風水探源—中国風水の歴史と実際』京都、人文書院
- 郭璞 4C『葬書』（葬經内篇）「三十三種叢書」第21 1877 湖北 崇文書局 東大東洋文化研究所蔵
- 加藤千代 1996「九十年代の毛沢東伝説—神格の諸相をめぐって—」『口承文芸研究』19 日本口承文芸学会
- 高菊村、龍剣宇、陳高举、劉建国、蒲葦 1993『毛澤東故土家族探秘』西苑出版社
- 姜彬編 1992『中国民間文学大辞典』上海文芸出版社
- 黎宛冰 1993『再上神壇的毛澤東—透視毛澤東熱現象』ハルビン 哈爾濱出版社
- 李澤厚 1985『中国古代思想』北京 人民出版社
- 劉敬叔 南朝宋 5C『異苑』（『筆記小説大観第十篇』）
- 劉萬草編 1929『廣州民間故事』志誥書社
- 劉志雄・楊静榮 1992『龍与中国文化』北京 人民出版社
- 林蘭編 1933『呆黄忠』上海 北新書局
- 林蘭編 1929『朱元璋的故事』上海 北新書局
- 林蘭編 1933『灰大王』上海 北新書局
- 森三樹三郎 1969「帝王の感生傳説」『中国古代神話』東京、清水弘文堂書房
- ニーダム、J 1956 東畑精一、薮内清監修、古川忠夫ほか訳 1991 新版『中国の科学と文明』東京 思索社 Needham, Joseph.. *Science and Civilization in China*, The syndics of Cambridge University Press.
- 王文祿 16C「龍興慈記」明・沈節甫編『紀錄彙編』巻13 1938, 上海 商務印書館（明万曆刻本影印版）東大東洋文化研究所蔵
- 定方昭夫 1997『『易』心理学入門—易・ユング・共時性—』東京 柏樹社
- 千野明日香 2000「三輪山神婚譚と中国の王朝始祖譚」『口承文芸研究』23 日本口承文芸学会
- 司馬遷 BC I『史記』中華書局 1996
- 鍾敬文 1935「老嫗稚伝説之發生地」『民族学研究』1巻1号 日本民族学会
- 鄧紅 1995『董仲舒思想の研究』東京 人と文化社
- 張光直 1982 小南一郎・間瀬収芳訳 1989『中国青銅時代』東京 平凡社 Chang, K.C.. *The Chinese Bronze Age*, The Chinese University of Hong Kong 1983
- 伊藤清司・森雅子・市瀬智紀訳 1994『古代中国社会—美術・神話・祭祀—』Art, Myth, and Ritual — *The path to political authority in ancient China*, Harvard University Press
- 渡邊欣雄 2001『風水の社会人類学—中国とその周辺比較』東京 風響社
- 安居香山 1979「感生帝説の展開と緯書思想」『緯書の成立とその展開』東京 国書刊行会 1969『緯書』東京 明德出版社
- 殷嘯虎・姚子明 1997『盜墓史』（中国社会民俗叢書）上海

文芸出版社

楊銀祿 2002『我給江青当秘書』香港 共和出版